



後三条天皇と護持僧・成尊：後三条天皇即位譚をめぐって

奥田， 静代

(Citation)

國文論叢, 33:16-26

(Issue Date)

2003-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012967>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012967>



後三条天皇と護持僧・成尊

——後三条天皇即位譚をめぐる——

奥田 静代

序

後三条天皇には五人、乃至は六人の護持僧がいたと伝えられている。^①成尊はそのうちの一人に挙げられる。彼は法友として、そして護持僧として常に後三条天皇に忠節を尽くした。もちろん後三条天皇の不遇な東宮時代にもその傍らには成尊の姿があった。成尊は後三条天皇の即位成就のために調伏法を修したと伝えられている。しかもこの調伏法は後三条天皇公認のもとで行われ、この二人が祝殺した人物とは後三条天皇の異母兄で今上の後冷泉天皇であったという。調伏法を遂行するには後三条天皇と成尊が強い信頼関係で結ばれていなければあり得なかつたであろう。そこでこの二人の関係を考察する。

後三条天皇が即位するに至った物語について『愛染王紹隆記』を基軸として考えてみたい。『愛染王紹隆記』は、藤原摂関家を後ろ楯としない後三条天皇の即位譚を愛染明王を中心に語った霊験譚である。霊験譚と修法書とは後三条天皇即位を希求して行われた愛染王法の捉えられ方は異なっている。そこで修法書を読

み解き、後三条天皇が異母兄・後冷泉天皇を調伏し崩御せしめたという凄惨な痕跡を辿り、更に後三条天皇の即位が当時どのような認識されていたのかを愛染明王の霊験譚を通して究明したい。

一、不遇の東宮時代

尊仁親王、つまり後三条天皇は後朱雀天皇の第二親王として誕生した。禎子内親王の所生で、異母兄に後冷泉天皇となった親仁親王がいる。尊仁親王は十二歳で東宮に立ち、三十五歳で即位するまで、二十三年にわたる長期間東宮位にあった。これは尊仁親王が藤原氏を外戚としなかつたため、関白藤原頼通に冷遇されたからだといわれている。尊仁親王の着袴の様子を記し留めた『春記』長暦二年十一月二十五日条は「関白殿被奉御車、又他上達部不参、侍臣四五人諸大夫四五人前驅而已」とあり、頼通は関白の職掌として御車を手配したものの、尊仁親王を迎え受ける時には参列もせず、従って、頼通に従う公卿たちも参らず、前驅役を務める人の数は極めて少なかつたと述べ、頼通の尊仁親王への距離を置いた接し方を伝えている。『春記』の記主で、当時蔵人頭を

務めていた藤原資房はこの一日を振り返り「惣今日毎事似等閑、是世之作法、執柄（頼通）不入其心之故也、可彈指々々」と頼通の態度を非難してこの日の日記を締めくくっている。

このような扱いをされていた尊仁親王は常に廃太子を恐れながらも、関白頼通の圧力に耐えた。頼通は自分自身、引いては摂関家にとって親近感の薄い尊仁親王を一応、東宮と認めたものの、

東宮たたせ給事はともかくもきこあざりけるを。よしのぶときこ給し大納言は宇治殿などの御をとうとの。たかまつの御はらにおはせしが。をまへにまいりて、二の宮（尊仁親王）をばいづれの僧にかつたてまつり侍べきときこ給けるに。ばうにこそはため。そうにはいかゞつけん。関白（頼通）のとうぐうの事はしづかにといへば。のちにこそはとおほせられけるを、けふたたせ給はずば。かなふまじきことに侍りと申給ければ。さはけふとてなん東宮はた、せ給ける。

という『今鏡』⁽³⁾に見られるような藤原能信の後朱雀天皇への働きかけがなければ、頼通は尊仁親王の立太子をやむやにしてしまふつもりであった。更に尊仁親王が東宮に冊立されたにもかかわらず、頼通の同母弟・教通は歎子を、そして頼通は寛子を後冷泉天皇の後宮に入れ、男皇子が誕生した際には尊仁親王を廃太子とする考であった。このような状況を踏まえた上で、『続古事談』⁽⁴⁾（神宮文庫所蔵の片仮名本）は東宮の守り刀・壺切の譲渡について以下のように語っている。

東宮ノ御マモリニツボキリトイフ大刀ハ、昭宣公ノ大刀也。延喜ノ御門儲君ニヲハシマシケルニタテマツラレタリケルヨ

リツタハリテ、代々ノ御マモリトナルナリ。

後三条院東宮ニ立給時、後冷泉院ヨリワタサレザリケリ。後冷泉院ウセ給テ後モトメイデ、大二条殿関白ノ時、後三条院ニタテマツラレニケリ。「立坊ノ後廿余年ワタサレデヤミニキ。今位ニツキテ後、トゞメラレズトモアリナム」ト世ノ人申ケリ。後三条院ヲホセラレケル「神璽宝剣エウナリシカドモ、廿余年スギニキ。ナニカクルシカラム」トトゞマリニケリ。

ここでは壺切の剣は尊仁親王に渡されていなかったとあるが、史実としては『土右記』の永承元年十一月二十二日条に「入御照陽舎、陣中所司敷延道、宰相中将持御劍壺切前行」と記されており、壺切の剣は尊仁親王立坊の初めに既に奉られている⁽⁵⁾。従って、『続古事談』の話は尊仁と頼通との客観的な関係を反映した話であるといえよう。このような説話が生成されていることから頼通の反・尊仁親王の態度は周囲にも敏感に感知されていたようである。

この尊仁親王の即位を物語るものが『愛染王紹隆記』に採録されている。

後三条院東宮ニテ久オハシマス間、御願成就ノタメニ、イカナル御祈ヲカ修セラルヘキト、小野僧都成尊ニ仰合ケレハ、速疾成就ノ法ヲ修セラルヘシト計申給。件法ハ何法ソトハル、愛染王法ニ候ト申サレケリ、即彼僧都ニ勤修セサセラル、処ニ、法験マコトニ速疾ニシテ、御願程ナク成就シケレハ、僧都勸願ニ准テ、丈六形像ヲ彫刻シテ曼荼羅寺ノ金堂ニ安置シ給ケリ。

本稿では右に引用した『愛染王紹隆記』の靈驗譚を核として論を進めるので、煩を厭わず意味をとっていききたい。「後三条院は東宮位に長い間いらつしたので、祈願が叶う為にはどのような御祈禱を行うのがよいだろうか」と小野僧都成尊に御相談になったところ、速やかに願いが叶う密教の修法を行われるのがよろしいでしょうということばかりをおっしゃられた。その修法というのは何の修法であるかと後三条院が問われ、小野僧都成尊は愛染王法でございす」と申された。そこで小野僧都成尊に厳かに行わせなさったところ、その効き目はまことに速やかにして御祈願はまもなく叶ったので帝ご自身のご要望により小野僧都成尊は、丈六の愛染明王のお姿を彫って曼荼羅寺の金堂に安置なさった。つまり、尊仁親王は希求するところがあり、成尊に愛染王法を行わせたところ悉地成就したという。

『愛染王紹隆記』の作者・編者は詳らかではないが、その書写者は東寺宝輪院に居を構えていた学僧・賢融といい、その内容は偏に愛染明王の靈驗譚を物語つたものである。成立は文永前後、つまり一二六四年から一二七五年前後の鎌倉時代中期であろうということが楠田良洪氏・永井義憲氏により論証されている。

まずこの類話を渉獵したところ『元亨釈書』『本朝高僧伝』『真言伝』に辿り着く。これらも後三条天皇の即位譚であるが、『愛染王紹隆記』と異なる所が多々見受けられるので以下に挙げる。

『元亨釈書』（宮内庁図書寮本）第九・感進四之一「成尊法師」釈成尊。仁海法師僕隸之子也。海見其稚孩。知_レ為_二法器_一。収鞠。及_レ長俊才日新。延久帝在_二儲位_一久。以_レ尊為_二法友_一。託以_二運祚_一。一日尊入_レ宮。帝拔_二白髮數莖_一。貯_二硯盞_一。賜_レ尊。

尊無_レ語而出。帰_レ坊修_二愛染王供_一。其_レ像_二冠師_一子_レ噴_レ血_二灑_二壇_一。不_レ幾帝即_レ位。尊之遇湍矣。延久六年正月七日卒。

『本朝高僧伝』（宝永四年刊本）卷第十一・淨恵二之八

釈成尊。（中略）後三条帝在_二儲位_一久。尊為_二法友_一。命_二捧_二踐祚_一。一日入_レ宮。帝時梳_レ頭。白髮數莖。隨_レ櫛而落。令_二持以示_レ尊。尊無_レ語而出。帰_二所住房_一。修_二愛染王供_一。其_レ像_二冠師_一子_レ噴_レ血_二灑_二壇_一。不_レ幾登_レ祚。恩遇益渥。（後略）

『真言伝』（正保三年刊本）

権少僧都成尊ハ。仁海僧正、入室ナリ。（中略）コノ人後三条院春宮ノ御時ヨリ護持ニ心ナシ。僧都春宮ノ御所ニ參ラレケルニ。侍女ニ御クシラケツラセオハシマス。御ハラヘニ御白ガオチサセ給タリケルヲ御覽シテ。白ガコソハヤオヒニケレト仰ラル。僧都此ノ御コトハラ承テ。御即位ノオソキ事ヲ心本ナクオホシメスニヤト思ケレハ。小野ノ住坊ニカヘリ。忽ニ愛染王ノ秘法ヲ修ス。法驗掲焉ニシテ踐昨アリ。是偏ニ成尊低請、イタス処ナリ。聖主治天ノ後。朝恩ト、コホラスシテ。寺務長者ニ至ル。秘法悉地成就ノ奇特等憚アルニヨリテ。委_レクシルシノセスト侍リ。延久六年正月七日入滅。春秋六十三。

このように『元亨釈書』『本朝高僧伝』『真言伝』の話の舞台は東宮坊で、尊仁親王が梳らせている際に白髪が抜け落ち、尊仁親王の白髪を契機として成尊が愛染王の秘法を修したという構成になっている。この白髪要素は尊仁親王の東宮時代が彼にとつては白髪が生える程、長くつらいものであるということを象徴していると解釈できる。そして『元亨釈書』『本朝高僧伝』では成尊の祈願が成就した徴として波線部のように「其ノ像ノ冠ノ師子、

血ヲ吐キ^①炬壇ニソソゲリ」と愛染明王特有の示現があつたと物語る。

『元亨釈書』『本朝高僧伝』に示現として語られている「冠師子」というのは「金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇經」^⑩に「身色如日暉住於熾盛輪三目威怒視首髻師子冠利毛忿怒形」というように、愛染明王の形像の一つの特徴として頭に師子冠を戴いていると説かれていることから、冠の師子が血を吐いたと指摘できる。愛染明王の「師子冠」に関して更に、『白宝口抄』^⑪（高野山金剛三昧院藏本）にも、

小野僧正調伏法時。書彼那摩置師子口。師子牙有血云々。即事而真談。難解難信也。只密教道理。以信可修行之也。

とある。「那摩」というのは『梵語集』に名前のことであると解説されている。この記事からも冠の師子による黙示があつたことを確認できる。つまり、調伏したい相手の名前を書いて師子の冠の口に置き、愛染王法を行ったところ、その示現として師子冠の師子の牙に血がついたと書き留められているのである。

二、愛染王法の実態

冠の師子が血を吐くという示現を示したのち、第一章で挙げた『元亨釈書』と『本朝高僧伝』そして『真言伝』は「程なく後三条が即位なさつた」と物語る。これは何を意味しているのであらうか。成尊と尊仁親王が異母兄・後冷泉天皇を調伏するために愛染王法を行わせたというのをほめかしているのではないかと推察する。

後冷泉天皇の崩御が尊仁親王の調伏によるものであつたことを

論証するために、『厚造紙』^⑬「玄秘抄」^⑭「薄草子口決」^⑮を根拠としてあげ、考察していきたい。

『厚造紙』（京都大学図書館藏本）

大僧都彼手^⑯後冷泉院御名梵字書令持。是調伏故也。

『玄秘抄』（京都大学図書館藏本）

大僧都彼手^⑰後冷泉院御名梵字書令持之。調伏故也云云。

『薄草子口決』（大正大学藏本）

大僧都彼手^⑱後冷泉院御名梵字書令持之。調伏故也。

右に挙げた三つの修法書には、大僧都（成尊）が「彼手」に後冷泉院の御名前と梵字を書いてこれを持たせたが、これは調伏のためであると明記されている。この「彼手」が一体どういうものであるかは『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇經』が手がかりとなる。そこには「左手持金鈴 右執五峯杵 儀形如薩埵 安立衆生界 次左金剛弓 右執金剛箭 如射衆星光 能成大染法 左下手持彼右蓮如打勢 一切惡心衆 速滅無有疑」とあり、愛染明王の六臂のうち、左の第一手は鈴を持ち、右の第一手は五鈴杵を、左の第二手には弓を、右の第二手には箭、そして左の第三手の「彼手」を右の第三手に持っている蓮で打ち砕くということが説かれている。具体的な「彼手」の解釈は『玄秘抄』^⑲に「彼者。或伝云。所求事也。作三空手。随三所求。臨三其時。以三昧耶一置彼手。成願。息災用レ輪輻、増益宝珠。調伏一鉢。敬愛蓮花。鉤召鉤。延命甲冑（云々）」とあり、持物はない場合が多く、信者の祈願するところの各々の物を持たせるのである。『厚造紙』などの修法

書ではこの「彼手」に後冷泉院の御名前と梵字を書いたものを持たせて、これを右の第三手の蓮で打ち砕き、調伏すると説明されているのである。『厚造紙』『玄秘抄』から時代のくだる「覚禪抄」(増上寺本)では次のように記されている。

遍知院授^三得大寺法眼^三説。あ^三ひあ^三某甲所求等書。

や^三て^三親仁^三あ^三ひ^三て^三あ^三書^テ。令^レ持事^{アリ}。令^レ奉^三

後三条院障^三礙後冷泉院^三。以^三右蓮^三令^レ打也。所持之彼^ハ後

三条院之心性也。上^二て^二親仁^一ト書。

「遍知院(義範)が得大寺法眼(静意)に授けた説によると、ウン・タ・キ・ウンの呪とその人の名前、そして求めるもの等を書く。調伏を意味する梵字ジャク・ラ・ジャと親仁という名前、そして降伏を意味する梵字のア・ビ・シャ・ロ・キャと書いて、愛染明王の彼手に持たせたことがあった。後三条天皇が後冷泉天皇を障礙させなれたのである。右手に持っている蓮で左手に持つジャク・ラ・ジャ親仁ア・ビ・シャ・ロ・キャを打つのである。彼手に持たせていた物が、ここでは親仁という名前と調伏を意味する梵字なので、後冷泉院を調伏したいというのが後三条院の本心であり、上に調伏の意味のラ・ジャと親仁の名を書いたのだ」と記されている。

この「覚禪抄」には修法を行った僧の名は記されていないが、遍知院義範は成尊の高弟であり、また次に挙げる『覚禪抄』(増上寺本)に、

伴僧(前略)後三条院御時。成尊勤修時。羯磨会愛菩薩真言被^レ用。範俊於弘徽殿勤修。伴僧愛菩薩言。云々

という箇所を見いだすことができ、ここには後三条院御時に成尊

勤修の羯磨会で愛菩薩の真言が用いられたとある。愛菩薩とは愛染明王のことであるので先程の『覚禪抄』に「遍知院授^三得大寺法眼^三説」として説明されていた修法の記事も、後三条のために成尊が修したものであったという可能性は高いと思われる。

三、成尊母・源俊賢女をめぐつて

では何故、複数の護持僧の中から、殊に成尊が修法を行ったであろうか。

小野僧都成尊は「雨僧正」の名で知られる小野僧正仁海の弟子である。師の仁海は愛染王法を広く修し始めたといわれており、その高弟であつた成尊も愛染王法を得意としたことは想像に難くない。その後、成尊の弟子の鳥羽僧正範俊と遍智院僧都義範なども愛染王法を頻りに行っている。例えば範俊は『真言伝』によると、白河天皇の慎みの年に愛染王法を修している。また義範も白河天皇御年二十五の重厄の年に愛染王法を修し、更に白河天皇中宮・賢子の為に愛染王法を行い、のちの堀河天皇を授かり、その御座の際には孔雀経法を修したとい⁽²⁰⁾う。

では何故成尊は後三条天皇の護持僧として傍近くに仕え、今上の後冷泉天皇を調伏したのであるうか。それは成尊の家系に負うところが多いと考えられる。

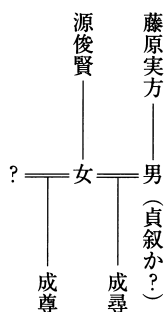
永井義憲氏は『成尋阿闍梨母集』に登場する「仁和寺の律師」に注目して成尊の周辺を内部徴証した。⁽²¹⁾その要旨のうち、本稿に関わると思われる要点は、

①成尊は成尋の一歳違いの同母弟

②成尊の母、即ち成尋の母は源俊賢女

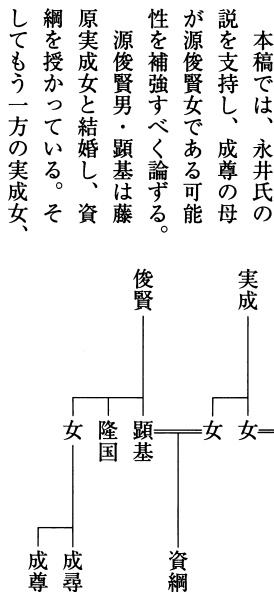
- ③成尋の父は藤原実方の子のうちの一人（貞叙か？）
④しかし成尋の弟・成尊の父と同一人物であるか否かは未詳

（成尊とその周辺）



である。但し④の成尋と成尊との父が同一であるか否かという点
 は本稿で論を進めていく際、必ずしも問題とはならない。

（主要関係簡略系図）



を務め、後に、その妍子所生の禎子内親王に仕えた。そのうち第一章で挙げたように後三条天皇の立太子は能信に負うところが大きく、立坊した尊仁親王の東宮大夫にも任命されている。能信は義理の甥にあたる資網とも親交を深め、造宮賞を資網に譲り、資網の昇進を図ったりしている。そして資網もまた東宮権亮や皇太后宮権大夫を務めた。つまり能信も資網も後三条天皇と禎子内親王を支えた人物なのである。

更に資網に関しては『古事談』『後三条院御幸後御葉崩御事』に、

五月七日崩御（御歳四十）。其時高房朝臣宅也（大炊御門南万里小路東也）。同十七日御葬送（神樂岡南也）。源中納言資網奉懸御骨（云々）。

とあるように、資網は後三条天皇が崩御した際にも忠節を尽くし、その遺骨を奉持している。

資網は後三条天皇崩御の後も禎子内親王や後三条天皇の皇子女に尽くした。『師記』承暦四年（一〇八〇）四月二十八日条によると、資網は後三条天皇の第二親王で、東宮の実仁親王の催しに、東宮大夫藤原能長、左京大夫藤原公房、三位侍從源季宗、頭弁藤原実政、民部卿藤原俊家、新中納言藤原宗俊、宰相中将源師忠、別当源俊明、藤大納言忠家、治部卿藤原経季、左衛門督藤原実季らと共に参画している。

更に同年五月七日条では陽明門院（禎子内親王）、一品宮聰子内親王、三宮輔仁親王の円宗寺御八講参会の際にも、左大将藤原師通、宰相中将源師忠、東宮大夫藤原能長、左衛門督藤原実季、左大弁藤原伊房、別当源俊明、左京大夫藤原公房らと共に資網は

参列している。

そして同年同月二十八日⁽²⁶⁾に円宗寺で行われた一品宮聰子内親王の心講でも源資綱を筆頭に、左衛門督藤原実季、新中納言藤原宗俊、右宰相中将藤原基長、左大弁藤原伊房、左京大夫藤原公房、三位侍從藤原季宗、そして記主・源経信らが名を列ねている。

このように資綱は小野宮流と道長室・源明子腹の流れの人々と共に後三条天皇にはもちろん、その母・禎子内親王や後三条天皇の皇子女たちを精力的に支えた。

以上のようなことから成尊の母・源俊賢女の家系は禎子内親王と後三条天皇に近い間柄にあったのである。

護持僧の任命には、母方の外戚が関与するということが堀祐氏によつて紹介されている。後三条天皇と成尊との関係を考慮してみると「母方」の範疇における任命権によつて、成尊も後三条天皇の母方の縁に引かれる形で護持僧に選ばれたと考えられる。

後三条天皇護持僧のうちの一人・勸修寺僧正信覚もまた禎子内親王と近い間柄といえる。信覚の父は閑院・藤原公季で、信覚の異母兄弟に

は実成がおり、

実成の娘の二

人は能信室、

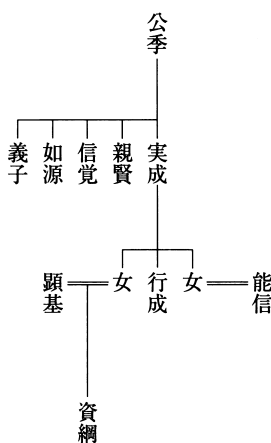
顕基室となる

のである。

従つて信覚も

実成女たちを

介して後三条



天皇と禎子内親王の縁に連なるのである。系図の輪をつなげると信覚も成尊と同様、後三条天皇とその生母・禎子内親王に帰結するのである。

ところで調伏法は愛染王法以外にも大威徳法・転法輪法などが知られている。では何故後三条天皇と成尊は数ある調伏法の中で、愛染明王を信仰し、愛染王法を行ったのだろうか。

この疑問を解く鍵は『覚禪抄』⁽²⁸⁾（増上寺本）にある。ここには瑜祇経批云。此法ハ中天竺摩伽竭国人。修習ルニ未レ足ニ一七日ニ。忽レ得ニ国王位ヲ。勿レ妄リニ与ルコト人ニ。密之中最秘密法也云々。

という興味深い説を載せている。後三条天皇と成尊が行った調伏は単に個人を調伏するという性格のものではなく、まさに国王位に関わる調伏であった。だからこそ、後三条天皇が愛染王法を修すことにした背景には、この「中天竺摩伽竭国人」の説が大きな意味をもつてくると考えられるのである。

四、「癰瘡」による後冷泉天皇の崩御

後冷泉天皇の崩御は後三条天皇と成尊の行った調伏によるものであると同時に、悪性の腫れ物によるものであったと伝えられている。そこで本章では後冷泉天皇の崩御の原因を「調伏」と「癰瘡」との二つに着目して論ずる。

『阿婆縛抄』⁽²⁹⁾（滋賀叡山文庫毘沙門堂蔵本）ではこの一連の話を一先例として挙げている。

一先蹤。

此法以三東寺ニ為レ本事。聊ニ其故ニ憚尤多。不レ可ニ外聞ニ

後冷泉院御時。後三条院東宮御坐之時。小野成尊僧都東宮、御持僧ニテ御前ニ祇候之時。東宮御髮梳御之間。御白髮一筋梳落タルヲ御覽シテ成尊ニ如何ニスル祈シ是見ヨ被テ仰有御落涙氣。成尊見ニ此御氣色。日来不ニ存知候。只任ニ御運罷過候畢。然者賜ニ身暇一殊可ニ祈精一之由申テ。入ニ籠テ本寺ニ愛染王七箇日奉供之間。後冷泉院御惱无レ程崩御。東宮令ニ即位一給了。但御在位不レ幾。然而如御本意ニ成就云々。成尊、無下ニ心短御ナル君哉ト密々申ケリ。誠法驗揭焉以外事也。自レ爾以來。多以ニ東寺人ニ令レ修レ之。全非下山門不レ知此法ニ々義ニハ。件時三尺木像彼手作拳向上ニ在ニ左乳辺ニ。縛ト羅囉若親仁弱叶鑊斛ト書テクリサケタリケリ。此尊于レ今伝テ有レ之云々。依ニ此靈驗ニ。後三条院御帰依之余。随ニ成尊ニ能々令ニ問学ニ給。白河院ニモ令レ奉レ授給ケリ。白河院モ信受シ御テ。法勝寺建立之時モ奉レ安置田堂ニ給ケリ。

この「阿婆縛抄」で留意したいのは「本寺ニ入り籠モリテ愛染王七箇日奉供ノ間、後冷泉院御惱。程ナク崩御。東宮即位セシメ給ヒ了ヌ。但シ御在位イクバクナラズ。シカレドモ御本意ノ如ク成就シケリト云々。成尊ハ無下ニ心短ク御スナル君カナト密々ニ申シケリ」という部分で、成尊の祈祷は七日で成就し、その結果、後冷泉は病となり崩御したというのである。

「七日で成就する」というのは靈驗譚によく見られる考え方で、七日で効果が無い場合は十四日、二十一日、二十八日というように七日を単位とする思想が観音信仰や不動信仰などと同様、愛染明王の靈驗譚においても反映されていると言える。その後、後三条天皇は即位したが在位期間はたったの四年程であつた。しかし

ながら、即位することができたので、かねてからの願いは見事に叶つたのだ、と「阿婆縛抄」は語る。以上のことから後三条が天皇が成尊に行わせた愛染王法は後冷泉天皇の呪殺を目的としたものであつたと、当時は認識されていたということが分かる。

また傍線部のように「彼手」に持たせる文字の部分をつ縛ト羅囉若（バザララージャ）つまり金剛王ニ愛染明王と書き、それに続けて親仁という名前、そして鉤・索・鎖・鈴を意味する弱（ジャク）畔（ウン）鑊（バン）斛（コク）と書くことと記されている。この部分は先程考察した「覚禪抄」とは大きく異なるが、この梵字の違いは東密と台密との修法式の差異の現れであろう。

「白宝口抄」³⁰（高野山金剛三昧院蔵本）では、

同云。イバ親仁ヲイバアデハ令持事。奉為後三条院。為障礙後冷泉院。以右連令打也。所持之彼者後三条院心性。此心性障礙。後冷泉院令打調伏也。故後三条院心性令持之上。イバ親仁書令持也。此等最秘云々。

或云。成尊僧都ハ後三条院春宮時御持僧也。參入時。鏡ヲ御覽シテマウニライラレニケル物カナ。僧都奉見之。始調伏法。後冷泉院ハ後三条御兄ニテ御ス。調伏其御位。七日師子自齒ニ血塗云々。癰瘡起御位。後冷泉院崩云々。

と新たに後冷泉天皇の死因は「癰瘡」、即ち疱瘡のうちでも特に「悪性の腫れ物」であつたと書き加えられている。

当時、疱瘡は周期的に猛威を振るい、生命を奪われた人を挙げると枚挙に暇がない。そこで、本稿で論じてきた禎子内親王にのみ言及すると、『中右記』寛治八年（一〇九四）正月十六日条に「今夜子時許、陽明門院（禎子内親王）崩于鴨院（是依疱瘡也、

御年八十二」とあり、禎子内親王も疱瘡のため八十二年の生涯を閉じたことが記されている。当時疱瘡で生命を落とした人たちは後を絶たなかった。それにもかかわらず後冷泉天皇の癰瘡での崩御だけは「調伏」によるものとして物語られているのである。このことから、後三条天皇が自らの即位のために、成尊に後冷泉天皇を調伏させ、「癰瘡」により死に至らしめたと当時信じられていたと導くことができる。更にもう一例、当時人々の後三条天皇即位に関する認識が垣間見られる記載として『野沢血脈集』(大和寺島寺藏徳川末期写本)にも、後三条天皇即位の裏側には後三条天皇が後冷泉天皇を調伏し崩御させたという生々しい物語が載せられているので次に提示する。

(前略) 此僧都後三条院ノ御持僧也。則チ東宮ノ御時僧都被レ入レ宮ニ時。御鏡被レ御覽セ已ニ年老スト被レ仰セ。其ノ時成尊謂ラク。後冷泉院ノ御位之間。東宮御即位遲シト思食スト得レ心。急テ修シテ愛染調伏之法ヲ後冷泉院ヲ奉ニ調伏ス。仍テ之無レ程崩御之間。東宮御即位在テ則云ニ後三条院ノ是也。但シ後三条院モ在位四年ニシテ無レ程崩御。成尊モ随テ入滅ス。是レ人ヲ調伏セル故歟。彼ノ調伏ノ本尊ハ法勝寺円堂ノ愛染明王是也。(後略)

右記の波線部「人」とは、後冷泉天皇を指し、後三条天皇と成尊の死は後冷泉天皇を調伏した報いか、と語られているのである。つまり、後三条天皇が成尊に愛染王法を修させ調伏し、後冷泉天皇を死に至らしめたという風説があったことを導くことができる。後三条天皇が後冷泉天皇を愛染王法によって崩御させたということは上述してきた史料にしか物語られていない。後冷泉天皇が

後三条天皇と成尊の愛染王法の調伏によって悪性の腫れ物ができ、呪い殺されたということが当時信じられ、説話として伝えられていたことを垣間見ることができた。『愛染王紹隆記』には語られない生々しい要素を内包する説話が『覚禪抄』などの修法書には累々と存在しているのである。

結

そもそも、成尊がいくら後三条天皇の護持僧であったとしても、今上の後冷泉天皇を障碍することはあまりにも恐れ多いことである。そして後三条天皇にとっても調伏を成尊に行わせるには、二人の結束と信頼感がなければあり得ないことである。そこで後三条天皇と成尊との関係を考察したところ、成尊はその母・源俊賢女の家系が藤原能信や源資綱に結びつくのであった。能信と資綱は共に禎子内親王と後三条天皇を支えた人物である。こうした縁により成尊もまた護持僧として後三条天皇を護っていたのであった。

後三条天皇がまだ尊仁親王と呼ばれ、東宮位に甘んじていた頃、後三条天皇と成尊は愛染王法を修して後冷泉天皇を調伏し崩御せしめた。当時、調伏法には様々な修法が用いられていたが、後三条天皇と成尊はこの愛染王法の調伏が単なる調伏ではなく国家の国王位に関わる性質のものであると自覚していたので「天然摩伽竭国人が七日間修習しただけで国王位に就くことが出来た」という愛染王法に望みを託したのである。かくして修法が行われ、愛染明王の冠の師子が示現を垂れた結果、後冷泉天皇は体に悪性の腫瘍が起こり、それが原因で崩御したと伝えられている。当時の

修法書を繙くとこのことが生々しく記されている。こういつたことから当時の人々が後三条天皇即位について、以上のように認識していたと知ることができる。しかし『愛染王紹隆記』に採録されている後三条天皇の即位譚には、調伏や癰瘡という要素は物語られていない。説話は少なからず人々の喜び、悲しみ、願望など、核となるものを追求すれば人々にとつての真実に辿り着くと私は信ずる。修法書に見られる凄惨な要素は削除され、穏当な靈驗譚に語り変えられているのも、そのためであらう。

註

- (1) 後三条天皇の護持僧は「護持僧補任」によると①法印大僧都靜円②權律師覺尋③阿闍梨信覺④阿闍梨頼範⑤阿闍梨成尊の五人である。「古事談」「後三条院春宮時益智參事」(池上洵一『島原松平文庫蔵古事談抜書の研究』研究叢書六十四・一九八八年十二月・和泉書院の141頁)には「御持僧勝範座主」とあり、第三十三代天台座主となる勝範も後三条天皇の護持僧であつたことが窺われる。
- (2) 『増補史料大成』所収の「春記」の19頁
- (3) 本文は「新訂増補国史大系」第二十一巻所収の『今鏡』「すべらぎ上」(司召し) 25頁より挙げた。なお人名は適宜(一)で補つた。
- (4) 本文は神戸説話研究会編『続古事談注解』(一九九四年六月・和泉書院)を用いた。『江談抄』の「壺切事」(『群書類従』第十八巻・雑部の634頁)には、
- (前略)而後三条院東宮之時。廿三年之間。入道殿不令_レ獻給云々。其故ハ藤氏腹東宮之宝物ナレバ。何此東宮可_二令_レ得給_一乎云々。仍後三条院被_レ仰之様。重切我持無益也。更ニホシカ
- ラスト被_レ仰ケリ。サテ遂ニ御即位ノ後コソ被_レ進ケレ。是皆古今所_二伝談_一也云々。
- とある。
- (5) 星野恒「歴世記録考・土右記」(『史学叢説』第一集・星野恒・明治四十二年三月・富山房所収)
- 角田文衛「皇太弟尊仁親王」(『後期摂関時代史の研究』古代学協会・平成二年三月・吉川弘文館所収)
- (6) 永井義憲「愛染王紹隆記」―解説と翻刻―(『日本仏教文学研究』3・一九八五年七月・新典社所収)
- 楠田良洪「愛染王紹隆記」の出現と同本文「東寺宝菩提院本」(『続真言密教成立過程の研究』・一九七九年三月・山喜房仏書林所収)
- (7) 『新訂増補国史大系』第三十一巻所収の『元亨釈書』の140頁
- (8) 『大日本仏教全書』巻第六十三巻・史伝部二の80頁
- (9) 『大日本仏教全書』巻第六十八・史伝部七の「真言伝」巻第六の59頁
- (10) 『大正新脩大藏經』第十八巻の『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』巻上「愛染王品第五」に以下のように説かれている。
- 於白月鬼宿 取淨白素氈 画愛染金剛 身色如日暉 住於熾盛輪
三目威怒視 首_レ髻師子冠 利毛忿怒形 又安五鈷鉤 在於師子頂
五色華髻垂 天帶覆於耳 左手持金鈴 右執五峯杵 儀形如薩埵
安立衆生界 次左金剛弓 右執金剛箭 如射衆星光 能成大染法
左_レ下手持彼 右蓮如打勢 一切惡心衆 速滅無有疑 以諸華鬘索
絞結以嚴身 作結跏趺坐 住於赤色蓮 蓮下有宝瓶 而呌吐諸宝
造像安於西 行人面西對 結大羯磨印 及誦根本明

- 兼示三昧耶 一字心密語 能成能斷滅 一切惡心衆 又結金剛界 三十七羯磨 及以本業明 速成百千事 薩嚩訥瑟吒 及諸該囉訶 加忿怒降伏 一夜當終竟 誦本根本明 結三昧耶印 又令伽跢耶 取紅蓮花藥 一百八護摩 一宿即敬愛 又令彼損伏 取白檀香刻 金剛愛染王 五指為量等 長帶於身藏 一切有情類及諸利利王 攝伏如奴僕 常結羯磨印 誦大根本明 增益一切福堅固如金剛 若七曜凌逼 命業胎等宿 画彼形那摩 置於師子口 念誦一千八 速滅不復生 乃至釈梵尊 水火風焰魔 頂行之惡類 夜走無辺方 一切惡種惹 淨行必芻衆 難調毒惡龍 那羅延自在 護世四天王 速除令失命 復說愛染王
- (11) 『大正新脩大藏經』圖像七所収の『白宝口抄』卷第一百十六(愛染王法上)「首髻師子冠利毛忿怒形事」の99頁
- (12) 『梵語集』は散佚しているが、『大正新脩大藏經』圖像七・『白宝口抄』卷第一百十六(愛染王法上)「首髻師子冠利毛忿怒形事」の99頁に『梵語集』からの引用が載せられている。
- (13) 『大正新脩大藏經』第七十八卷所収の『厚造紙』「愛染王法」の272頁
- (14) 『大正新脩大藏經』第七十八卷所収の『玄秘抄』卷第二「愛染王法」の389頁
- (15) 『大正新脩大藏經』第七十九卷圖像七所収の『薄草子口決』卷第十五「諸明王部第三」の267頁
- (16) 註14に同じ。
- (17) 『大日本仏教全書』卷第五十三・圖像部三の『覺禪抄』(愛染王法下)「同手彼手作法事」の139頁
- (18) 『大日本仏教全書』卷第五十三・圖像部三の『覺禪抄』(愛染王法上)「道場観」の121頁
- (19) 『大日本仏教全書』卷第六十八・史伝部七の64頁
- (20) 拙稿「竹人説話」生成論 義範と範俊に関する一連の説話群を中心に― 佛教文学27・二〇〇三年三月
- (21) 永井義憲「成尊とその周辺」密教学研究9・一九七七年三月
- (22) 藤原能信と源資綱に関する考察は、福長進「大鏡」の作者」(平安文学論究会『講座平安文学論究』第十一輯・平成八年四月・風間書房所収)に詳述されている。
- (23) 『新訂増補国史大系』第十八卷所収の『古事談』第一・王道后宮の18頁
- (24) 『史料大成』第五卷所収の『帥記』の30頁
- (25) 『史料大成』第五卷所収の『帥記』の32頁
- (26) 『史料大成』第五卷所収の『帥記』の41頁
- (27) 堀祐「護持僧と天皇」(『日本国家の史的特質 古代・中世』大山喬平教授退官記念会・一九九七年五月・思文閣出版所収)
- (28) 『大日本仏教全書』卷第五十三・圖像部三の『覺禪抄』(愛染王法上)「感應事」の116頁
- (29) 『大日本仏教全書』第五十九卷・圖像部九の『阿婆禪抄』第一百十五「愛染王」の50頁
- (30) 『大正新脩大藏經』圖像七の『白宝口抄』卷第一百十七(愛染王法中)「左下手持彼右蓮如打勢乃至無有疑」の103頁
- (31) 『大日本古記録』所収の『中右記』二の16頁
- (32) 『真言宗全書』三十九所収の『野沢血脈集』卷第一「第十六成尊」

(おくだしずよ／神戸大学大学院生)